

## レビ記16章「罪の大掃除」

### 1A 宥めのための備え 1-10

1B 聖所への入り方 1-5

2B 罪のきよめのささげ物 6-10

### 2A 宥めの実行 11-28

1B いけにえの屠り 11-22

1C 大祭司の罪のきよめ 11-14

2C 民の罪のきよめ 15-19

3C アザゼルの追いやり 20-22

2B 屠った後の水洗い 23-28

### 3A 宥めの日 29-34

## 本文

私たちはついに、レビ記 16 章に入ります。ここは、レビ記全体の最高峰と呼んでよいところでしょう。主が聖なる方で、私たちはこの方に招かれていることをレビ記は教えています。それは、いけにえを通してです。私たちが聖くなるのは、自分が例えば、嘘をつかない、お酒を飲まないとか、何らかの行為によるものではありません。キリストが行われたことによります。キリストがご自身をいけにえとして父なる神に献げることに基づいて、私たちが自分自身を献げることによって神に近づきます。この、いけにえによる聖めの道を見てきました。

そして、聖なる者となることの最高峰は、神ご自身が人の罪に対してどのように対処されるかという、神の決断であります。16 章は、レビ記 23 章に出てくる七つの祭りの一つである「宥めの日」であります。以前の改訳では「贖罪日」と訳されてきました。ヘブル語ですと「ヨム・キプール」です。ヨムが「日」であり、キプールは贖いですが、「覆う」ということを意味しています。罪を覆うということです。ここでは、神ご自身がイスラエルの罪について、一切、思い出さないということを決める時です。そして、彼らを受け入れるべくご自身の聖所を用意されます。

年に一回行うのですが、私たち日本人にも似たような慣わしがありますね。年末の大掃除です。これまで溜まった穢れを清めるのです。けれども、もちろんこれは、まことの神の前ではあまりにも表面的です。長年かけてたまった歯の着色を、一回の歯磨きできれいにするような試みです。イスラエルの神は、根本的な治療を施されます。生まれてきた時の赤ちゃんの歯のようにきれいにするように、罪を清められます。しかし、それでも一年経つと、汚くなっていきます。新しい契約は、ゆえに偉大です。一年といわず、ただ一度の罪のきよめのいけにえによって、永遠に聖めてくださるみわざを成し遂げてくださいました。

## 1A 宥めのための備え 1-10

### 1B 聖所への入り方 1-5

<sup>1</sup> アロンの二人の息子の死後、すなわち、彼らが主の前に近づいて死んだ後、主はモーセに告げられた。

これまでしばらくの間、11 章から 15 章まで私たちは、汚れときよいことの区別について見てきました。10 章にて、アロンの息子、ナダブとアビフが、主が命じられたものとは異なる火を献げたので、主からの火で焼かれてしまいました。そこで主は、教えを、汚れと清めの区別に迂回させて、11 章から 15 章まで押しおられたのです。

<sup>2</sup> 主はモーセに言われた。「あなたの兄アロンに告げよ。垂れ幕の内側の聖所、すなわち箱の上の『宥めの蓋』の前に、時をわきまえずに入ることがないようにせよ。死ぬことのないようにするためである。『宥めの蓋』の上で、わたしは雲の中に現れるからである。

何をもって、異なる火だったのかと言いますと、彼らは聖所の中に入り、垂れ幕を通り、至聖所の中まで入ろうとしたことが分かります。その「宥めの蓋」の前まで入って行こうとしました。ここは、これから見て行けばわかりますが、大祭司が年に一回、第七の月の十日のみ入ることができるところです。宥めの蓋の意味が分かれば、彼らのしていることを主は、火をもって滅ぼしたとしても仕方のないことだったのです。実に、私たちすべての人の救いに関わることですから。

宥めの蓋は、主の憐れみの御座を示しています。そこに血があてがわれて、神の裁きの御座が恵みの御座になっているところです。「ヘブル 4:16 ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」しかし、主は、ご自身の御座が憐れみと恵みを施すところとなるには、相当の準備が必要になります。その宥めの蓋には、ケルビムが彫られています。ケルビムは、創世記 3 章で、罪を犯してエデンの園から追放されたアダムとエバが、命の木から実を取って食べないように、炎の剣をもって守っていました。神が臨在される所には、人はもはや中に入ることができなくなったのです。

この問題を根本的に解決するのは、神ご自身がご自分の住まわれるところに人が入ってくることができるように、対策を採らなければいけません。これを「聖所をきよめる」と言います。主が住まわれる所が汚くなった、という意味ではなく、人をご自分が住まわれる聖なる所に受け入れることができるように整えることです。このことを詳しく説明しているのは、ヘブル人への手紙です。宥めの日をたくさん取り上げています。その一つをお読みしたいと思います。9 章 7 節からです。

7 しかし、第二の幕屋には年に一度、大祭司だけが入ります。そのとき、自分のため、また民が知らずに犯した罪のために献げる血を携えずに、そこに入るようなことはありません。8

聖霊は、次のことを示しておられます。すなわち、第一の幕屋が存続しているかぎり、聖所への道がまだ明らかにされていないということです。9 この幕屋は今の時を示す比喻です。それにしたがって、ささげ物といけにえが献げられますが、それらは礼拝する人の良心を完全にすることができません。10 それらは、ただ食物と飲み物と種々の洗いに関するもので、新しい秩序が立てられる時まで課せられた、からだに関する規定にすぎません。11 しかしキリストは、すでに実現したすばらしい事柄の大祭司として来られ、人の手で造った物でない、すなわち、この被造世界の物でない、もっと偉大な、もっと完全な幕屋を通り、12 また、雄やぎと子牛の血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられました。

幕屋は模型であり、天を表していたことはすでに出エジプト記で学びました。そして宥めの日に大祭司が行なうことは、キリストが偉大な大祭司としてただ一度、父なる神が座しておられるまことの至聖所に入って、ご自分の血を携えていかれたことを示していたのです。キリストの流された血が、神が座しておられる天が人々を受け入れる大掃除をしてくれた、完全なきよめを行なってくれた、ということであります。したがって、これから読む、大祭司が行なうことは、キリストが天に私たちが入るために用意してくださったことを見ることができます。

<sup>3</sup> アロンは次のようにして聖所に入る。罪のきよめのささげ物として若い雄牛、また全焼のささげ物として雄羊を携え、<sup>4</sup> 聖なる亜麻布の長服を着て、亜麻布のももひきを履き、亜麻布の飾り帯を締め、亜麻布のかぶり物をかぶる。これらが聖なる装束であり、彼はからだに水を浴びて、それらを着ける。

いけにえを献げるに当たって用意しなければいけないものです。まず、自分と自分の家族のために罪のきよめのささげ物です。若い雄牛が必要です。そして後で、全焼のいけにえも献げるので、そのための雄羊も用意します。これから、イスラエルの罪の清めのために、いけにえを献げるのですが、その前に自分自身の罪が清められなければいけません。彼はこれから至聖所に入ります。彼自身に罪が残されているならば、滅ぼされてしまうからです。

これは、キリストの罪なき姿を表しています。偉大な大祭司であるキリストが、自分自身に罪があってはなりません。もしあれば自分自身の罪のために血を流さなければいけなくなり、私たちに代わって罪を贖うことができないからです。ゆえに、主は初めから罪の性質を持っておられなかったし、また罪を犯されませんでした。この方が処女マリアから、聖霊による妊娠でお生まれになったのはそのためです。アダムからの罪を受け継いでいないのです。そして、主は肉体を持っておられましたので、あらゆる誘惑は受けられましたが、罪は犯されませんでした。

次に、服を着替えます。いつもの栄光と美を表している装束は脱ぎます。その代わりに、すべて

が亜麻布の服を身に付けます。長服も、飾り帯も、かぶり物もすべて亜麻布です。そして、この儀式が終わってからいつもの装束に着替えますが、これはイエス様が天におられる栄光を脱ぎ捨てて、肉体の姿を取られて卑しくなられたことを意味しています。「ピリ 2:6-8 キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」

<sup>5</sup> 彼はまた、イスラエルの会衆から、雄やぎ二匹を罪のきよめのささげ物として、雄羊一匹を全焼のささげ物として取る。

イスラエルの会衆のための、罪のきよめのささげは二頭のやぎです。全焼のささげ物のために雄羊も用意します。

## 2B 罪のきよめのささげ物 6-10

<sup>6</sup> アロンは、自分のための罪のきよめのささげ物である雄牛を献げ、自分と自分の家族のために宥めを行う。<sup>7</sup> 雄やぎ二匹を取り、それを主の前、会見の天幕の入り口に立たせ、<sup>8</sup> 雄やぎ二匹のためにアロンがくじを引く。一つのかじは主のため、一つのかじはアザゼルのためである。<sup>9</sup> アロンは主のためのくじに当たった雄やぎを連れて来て、それを罪のきよめのささげ物とする。<sup>10</sup> アザゼルのためのくじに当たった雄やぎは、主の前に生きてままで立たせる。これは、それの上で宥めを行い、荒野のアザゼルのもとへ追いやるためである。

先ほど話したように、大祭司はまず自分と自分の家族のための、罪の清めを行います。次に、イスラエルの会衆の罪の清めのための、二頭のやぎですが、一頭は屠ります。そして血を至聖所に大祭司が携えます。けれどももう一頭は、生きてまます。これは後で荒野に放ちます。「アザゼル」はヘブル語ですが、「出て行く」とか「追放された」とか「取り除く」というような意味があります。ですから、イスラエルの罪が赦されるだけでなく、荒野に放たれたことによって、罪が遠くに追いやられたことを意味します。

## 2A 宥めの実行 11-28

ここまでが宥めのための用意です。次から宥めを実行します。

### 1B いけにえの屠り 11-22

#### 1C 大祭司の罪のきよめ 11-14

<sup>11</sup> アロンは自分のために、罪のきよめのささげ物である雄牛を献げ、自分と家族のために宥めを行う。彼は自分のために、罪のきよめのささげ物である雄牛を屠る。<sup>12</sup> 彼は主の前の祭壇から炭火を火皿いっぱい、また、粉にした香り高い香を両手いっぱいに取り、垂れ幕の内側に持って

入る。<sup>13</sup> その香を主の前の火にくべ、香から出る雲が、あかしの箱の上の『宥めの蓋』をおおうようにする。彼が死ぬことのないようにするためである。

いけにえをほふるのは、外庭の青銅の祭壇であることには変わりないですが、そこにある炭火を火皿に入れます。それから、香りの高い香を取ります。この香については、以前、特別な調合をした、「きよい、聖なる香」と呼ばれるものです(出エジプト 30:34-38)。そして聖所に入り、香を炭火に入れて焚きます。それを、煙(ここでは「雲」と書いてありますが)にして、至聖所の中に入ります。この香は、主の前での執り成しを意味しています。祈りをもって、罪ある者が主の前に赦されるのです。「ロマ 8:34 だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていただくのです。」

<sup>14</sup> それから、雄牛の血を取り、指で『宥めの蓋』の東側に振りまき、また、指で七度その血を『宥めの蓋』の前に振りまく。

これが「血によるきよめ」です。至聖所の契約の箱の上にある「宥めの蓋」の東側にまず振りまきます。東側ですから、契約の箱の手前です。そして宥めの蓋の前に七度、振りまきます。

この「宥めの蓋」は、ギリシア語では「宥めのささげ物」と訳されているのと同じです。ヨハネ第一 2 章を開いてください。「2:2 この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のための宥めのささげ物です。」神の怒りの全てがそこで満たされた、ということです。宥めの蓋の前で血を振りかけたというのは、私たちの罪に対する神の怒りが、すべてキリストの血にあって満たされたことを意味しています。

このことをヘブル人への手紙の著者は、天においてなされた、キリストご自身の血による贖いを示していることを教えています。「ヘブル 9:11-12 しかしキリストは、すでに実現したすばらしい事柄の大祭司として来られ、人の手で造った物でない、すなわち、この被造世界の物でない、もっと偉大な、もっと完全な幕屋を通り、また、雄やぎと子牛の血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられました。」天における神の聖所が、キリストの血によって、人々が天に入って来るんことができるように、清めてくださったということです！

## 2C 民の罪のきよめ 15-19

次に、イスラエルの民のために、罪のきよめを行います。

<sup>15</sup> アロンは民のために、罪のきよめのささげ物である雄やぎを屠り、その血を垂れ幕の内側に持って入り、この血を、先の雄牛の血にしたように、『宥めの蓋』の上と『宥めの蓋』の前にかける。<sup>16</sup>

彼はイスラエルの子らの汚れと背き、すなわちそのすべての罪を除いて、聖所のための宥めを行う。彼らの汚れのただ中に、彼らとともにある会見の天幕にも、このようにする。

民のためにも、同じように血を至聖所まで携えて、宥めの蓋の上と前に振りかけます。イスラエルの民は、祭司と違って、聖められていないままで、いけにえを携えてくるために、幕屋の入口の青銅の祭壇のところまで来ます。それによって聖所だけでなく、会見の天幕全体も汚れています。そのためにも、至聖所にある宥めの蓋のところで血をかけて、清める必要があります。

<sup>17</sup> 彼が宥めを行うために聖所に入って、再び出て来るまで、だれも会見の天幕の中にはならない。彼は自分と自分の家族、それにイスラエルの集会全体のために宥めを行う。

大祭司は、これらのことをすべて、息子の祭司らの助けを借りず、自分独りで行ないます。イエス様はこれを行なわれました。十字架に至る道はすべて独りで行なわれました。ゲッセマネの園のことを思い出してください。主は三人の弟子、ペテロとヨハネとヤコブを連れて、そばにいてもらい、それからさらに独りで父なる神に祈られましたが、三人は眠ってしまいました。そしてイエスを捕える者たちが来た時は、弟子たちは逃げていきました。ペテロは遠くから付いていきましたが、イエスを三度知らないと言ったのです。ですから、自分独りで贖いを行なわれたのです。

<sup>18</sup> そして、主の前にある祭壇のところに出て行き、そのために宥めを行う。すなわち、彼はその雄牛の血と雄やぎの血を取り、それを祭壇の四隅の角に塗る。<sup>19</sup> また、その残りの血を、その祭壇の上に指で七度振りまく。こうして彼はイスラエルの子らの汚れからそれをきよめ、聖別する。

残りの血は、イスラエルの民が、いけにえを携えて来て近づく青銅の祭壇を清めるのに用います。まず、祭壇の四隅の角に塗ります。角は力や権威を表して、救いの力を示しています。そして、祭壇の上に七度振りまきます。これで、イスラエルの罪は清められました。

### 3C アザゼルの追いやり 20-22

主は、罪をきよめられるだけでありません。罪を遠くに追いやる働きを行われます。

<sup>20</sup> 彼は、聖所と会見の天幕と祭壇のための宥めを行い終えたら、先の生きている雄やぎを連れて来る。<sup>21</sup> アロンは生きている雄やぎの頭に両手を置き、その上で、イスラエルの子らのすべての咎とすべての背き、すなわちすべての罪を告白する。これらとその雄やぎの頭の上に載せ、係りの者の手でこれを荒野に追いやる。<sup>22</sup> 雄やぎは彼らのすべての咎を負って、不毛の地へ行く。その人は雄やぎを荒野に追いやる。

生きているやぎ、アザゼルです。英語ですと「スケープゴート」ですが、ヘブル語の「アザゼル」は、



「出て行く」とか「追放された」とか「取り除く」というような意味があります。このやぎの頭に手を置きます。按手は手を置いた対象と一体になることを表しています。ここでありっただけのイスラエルの罪を告白します。そこで、やぎは、イスラエルのすべての罪を負った存在になるのです。そして、その罪が荒野の中で遠く離れて見えなくなります。

ここの「荒野」とは、イスラエルが約束の地に定住し、エルサレムを都としてからは「ユダの荒野」になります。エルサレムの東にあるオリーブ山を越えると、急に荒地になります。さらに行くと、完全に荒野になります。道路は急降下です。死海のところまで続きますが、そこは世界で最も低い陸地だからです。この荒野にアザゼルを放つようにします。大祭司は神殿から眺めています。そして数人の者たちが、距離を置いて分岐点に経ちます。確かにやぎが荒野に進んでいるのを確認します。そして最も遠くにいる者が、確かにアザゼルが見えなくなったことを確認して、今度はエルサレムに向かって合図を送るのです。伝言のようにエルサレムに合図が伝わります。そして大祭司がその伝言を受け取って、罪が遠くに追いやられたことを宣言するのです。

このように、主が宥めの日に意図されているのは、一切、これからは持ち出さない罪のことです。ただ罪を覆い隠すだけの贖いではなく、罪を取り除くための贖いです。これで最終的な処置を取ったのであり、これ以上何もしない、残すところは何もなく、余るものも何もない状態です。これをヘブル人への手紙では、「永遠の贖い」と呼んでいます。キリストがただ一度、血を流されたことによって、いっさいの罪をなかったことにする働きであります。神のほうでこれを決めてしまわれたので、神は罪については、一切不問に付しておられます。

いかがですか、これを主は行なってくださいました。「詩 103:12 東が西から遠く離れているように主は私たちの背きの罪を私たちから遠く離される。」と言われます。そして思い出さないととも言われます。「イザ 43:25 わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたの背きの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。」

## 2B 屠った後の水洗い 23-28

<sup>23</sup> アロンは会見の天幕に戻り、聖所に入ったときに着けていた亜麻布の装束を脱いで、そこに残しておき、<sup>24</sup> 聖なる所だからだに水を浴び、自分の衣服を着て外に出て、自分の全焼のささげ物と民の全焼のささげ物を献げ、自分のため、民のために宥めを行う。<sup>25</sup> 罪のきよめのささげ物の脂肪は、祭壇の上で焼いて煙にする。

着替えは聖所で行なっていました。そこに残してあった装束を再び身に付けました。イエス・キリストは人間の肉体を取られて卑しくなりましたが、けれども、死の中にとどまっていることはなく、よみがえられました。そして、よみがえられただけでなく、天に昇られました。ちょうど大祭司が再び装束を身に付けたように、キリストも初めに持つておられた父の栄光を、昇天によって再び受け

られたのです。

そして、その後に全焼のいけにえをいつものように捧げます。さらに、罪のきよめのささげ物の脂肪がそこにまで残っていて、火の中で焼かれています。

<sup>26</sup> アザゼルの雄やぎを追いやった者は衣服を洗い、からだに水を浴びる。その後で、宿営に入ることができる。

山羊が罪を負ってなくなったので、それを見張っていた者たちも汚れを負ったために、宿営に入るには水の洗いをします。

<sup>27</sup> 罪のきよめのささげ物の雄牛と、罪のきよめのささげ物の雄やぎで、その血が宥めのために聖所に持って行かれたものは、宿営の外に運び出し、皮と肉と汚物を火で焼く。<sup>28</sup> これを焼く者は自分の衣服を洗い、からだに水を浴びる。その後で、宿営に入ることができる。

罪のきよめのささげ物は、皮、肉、汚物は祭壇の上で焼いてはならず、宿営の外に捨て場で捨てなければいけません。そして捨てた者は、帰ってくるときは、念を入れてからだに水を浴びます。

### **3A 宥めの日 29-34**

<sup>29</sup> 次のことは、あなたがたにとって永遠の掟となる。第七の月の十日には、あなたがたは自らを戒めなければならない。この国に生まれた者も、あなたがたの中に寄留している者も、いかなる仕事もしてはならない。<sup>30</sup> この日は、あなたがたをきよめようと、あなたがたのために宥めが行われるからである。あなたがたは主の前ですべての罪からきよくなる。<sup>31</sup> これがあなたがたの全き休みのための安息日であり、あなたがたは自らを戒める。これは永遠の掟である。

これまで見て来た、宥めの日は、第七の月の十日にあります。今の暦の10月の始め辺りです。「自らを戒めなければならない」とは、断食と解釈されます。全き休みであり、主はどんな仕事してはならないと、強く命じておられます。これはキリストが一切の罪を取り除いてくださった、贖いの完成を示しているからです。永遠の贖いを成し遂げてくださったので、もうこれ以上、救われるためにしなければいけないことは一切になくなったので、その完成した業に留まることしかできないことを意味しています。すでに贖いは完成しました。これ以上、何もすることがないのです。このことを教えているヘブル書10章の箇所を読みましょう。10-14節です。

10 このみこころにしたがって、イエス・キリストのからだを、ただ一度だけ献げられたことにより、私たちは聖なるものとされています。11 さらに、祭司がみな、毎日立って礼拝の務めをなし、同じいけにえを繰り返し献げても、それらは決して罪を除き去ることができませんが、



12 キリストは、罪のために一つのいけにえを献げた後、永遠に神の右の座に着き、13 あとは、敵がご自分の足台とされるのを待っておられます。14 なぜなら、キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって永遠に完成されたからです。

この完全な、永遠の贖いを成し遂げてくださったので、私たちが救われるためにすることは、何一つなくなり、ただ、このお働きに憩うだけになったのです。ですから、今、私たちができることは、感謝することです。賛美することです。そして、喜んで主に仕えることです。自分の義を達成するためにこれらのことを行なうのではなく、すでに達成されたから行うのです。

<sup>32</sup> 油注がれ、父に代わって祭司として仕えるために任命された祭司が、宥めを行う。彼は亜麻布の装束、すなわち聖なる装束を着ける。<sup>33</sup> 彼は至聖所のための宥めを行い、また会見の天幕と祭壇のための宥めを行う。彼はまた、祭司たちと集会のすべての民のための宥めを行う。<sup>34</sup> 以上のことは、あなたがたにとって永遠の掟となる。これは年に一度イスラエルの子らのために行われる、彼らのすべての罪を除く宥めである。」モーセは主が命じられたとおりに行った。

アロンが死ねば、その子が後を継いで大祭司となります。そして同じように、ただ独りでこれらの贖いを行いません。このようにして、代々、大祭司が執り行うべき、永遠の掟になっています。ここに、キリストの贖いの永遠性が映し出されています。そして、年に一度、行うのですが、毎年行うことによって、後に来る、永遠に贖い出される実体があることを待ち望むようになっているのです。律法によって、実体のキリストが来ることを切に願うようになっています。

これでレビ記の前半、「いけにえによる聖めの道」が終わりました。次回から、この聖めをいかに保っていくのか、という課題について学びます。この世から別たれた、聖なる生活によって神と歩んでいくことを学びます。